20201011レムナント教会1部

**絶対キリスト(Ⅱサムエル記13:30-33)**

　人々は、何かの問題があった場合に、その問題の解決だけにフォーカスを合わせて工夫することがあります。しかし、信者の私たちは、何かの問題があったときに、その問題の中に隠されているメッセージを発見するようにしなければなりません。神様は何かの問題を通してメッセージを私たちに語っていらっしゃるお方であるので、そのような工夫、心掛けが求められるわけです。

　今日の聖書の箇所では、ダビデの家庭に、特に子どもたちに大変な問題が起きてしまいました。ダビデの息子の中の一人アムノンという人は、腹違いの兄弟アブシャロムの妹であるタマルとう女の子をとても好きで好きでたまらない状態でした。しかし、どうすることもできなかったので、家来の一人が悪いことを考えて、最終的にタマルという腹違いの兄弟の妹さんをレイプすることになってしまいます。そして、その行為が終わったとたんに気持ちが覚めてしまい、もう用なしだよということになり、そのタマルが灰をかぶって涙を流しているのをお兄さんのアブシャロムが見ました。どういうことなのかと聞いたときに、その詳細を聞くことになります。すぐさま行動を起こしたわけではなく、タイミングを計って、結局、ダビデの子どもたち全員を集める機会があり、その中でアブシャロムがアムノンだけを殺すことになります。つまり、復讐を果たすことになりました。それでダビデの耳に「あなたの息子たちが、つまり、王子が皆アブシャロムに殺されました」という報告があり、ダビデがびっくりしていたとき、実はほかの王子たちは無事でアムノンだけが殺されました。それはそのような事情があったのでアブシャロムの復讐でしたという報告を聞いて、ダビデも泣いてそこにいた皆も泣いていたという話です。それから、アブシャロムは遠いところに逃げてしまいました。この報告を聞いたときに、家庭内に、特に子どもたちの中でこういう問題が起きたというのをダビデが見て、他の箇所には非常に怒りを覚えていたという表現もあります。けれども、それは単なる子どもたちに問題があって、何をしてるのかという怒りとは言えないと思います。ダビデの心境はどのような心境だったでしょうか。まるでペテロがイエス様を目の前で三度否定して、その後よみがえられたイエス様が訪ねて来られたときに、「あなたは他の人よりわたしのことを愛しているのか」と聞かれてペテロが非常に困っていたではないでしょうか。それと似た心境ではないかなと思います。ダビデはアムノンが犯してしまったその罪を見ながら、自分のことを思い出したのではないかと思うのです。自分もそういうことをやっていたので。それから、復讐のことでアブシャロムがアムノンを殺してしまいました。自分も間接的ではありますが、人を殺した経験があったわけです。だから、そのダビデが子どもたちに起きていることを見ながら、どのような心境でそれを見ていたのでしょうか。それを私たちは察しないといけないと思います。ダビデはもちろん個人的に神の前で悔い改めて、神様に赦しをいただいて、それを通して自分がどれほど罪人なのか、根本的にどうしようもない、母の胎からもう罪人であったと告白するほど、自分が根本的にダメな人間だということを悟っていました。しかし、子どもたちに起きていることを見ながら、自分だけの問題ではなくて、子どもたちも一緒なのだ。つまり、皆同じなのだということに、個人の人間がどうなのかを悟ると同時に、人類が、世界中が、行為がどうであろうが皆罪人なのだなということに気づく機会となったと思います。つまり、すさまじくダビデは確認することになりました。

　何をでしょうか。大事です。本当にすべての人は罪人なのだ。ダビデが罪人だと告白するときには、泥棒をした、悪いことをしたという次元の罪ではありません。今地球上、さばきが横行していて、争いや葛藤が絶えないまま、消えないままずっと続いています。その理由がどこにあると思いますか。もし世界中の人が、すべての人は白人であれ黒人であれ、ユダヤ人であれ異邦人であれ、すべての人は罪人だということが分かっていれば、争いなどは起きるはずがありません。これが分かっていないのでさばきが横行しているわけです。人との間の葛藤が消えません。なぜなのでしょうか。何かの問題があるからではなくて、おまえも罪人、私も罪人、すべてが罪人だという意識も認識も知識も理解も全くないからなのです。アダムとエバが神様に罪を犯したあと、神様が訪ねて来られて彼らに聞きました。「何をしたのか。なぜこうなってしまったのか。なぜ不安で恐怖に駆られてどうしようもないこういう状態になってしまったのか」と聞いたときに、アダムが「あなたが与えられた妻、この女の人のゆえにこうなりました」と言います。すると、神様は女の人に聞きました。「なぜこういうことをしたのか」。「この蛇に誘われてそうなってしまいました」。嘘ではありません。事実です。しかし、それだけを見ている限りは、すべての人が罪人だという理解にはたどり着くことができないし、結局、精一杯やることがいちじくの葉をつづり合わせてスカートを作ることしかできません。それは解決にも幸せにも答えにもならないものなのです。嘘ではないけれども、なぜ彼らはいちじくの葉をつづり合わせるそちらの方に行くしかない、何かのせい、誰かのせいにしているのでしょうか。本当のことが分かっていないからです。蛇ではありません。女の子でもありません。黙示録12：9には、その蛇のことを「大きな竜」「古い蛇」「世界を惑わしている悪魔、サタン」と言われています。それが目に見えないから誰も気づいていません。古い蛇、悪魔、サタンが本当の原因だということが分かっていれば、道は一本しかありません。人間のいちじくの葉をつづり合わせる努力ではありません。誠実さでもまじめさでも何でもありません。女の子孫が現れて、蛇の頭を踏み砕く。女の子孫、キリスト・イエス、メシヤ以外には道がありません。けれども、いつまでたっても誰かのせい、何かのせいにしていれば、それにずっと縛られて捕らわれて生きていくしかありません。それがもう脳細胞に染みこまれているのでなかなか取れないわけです。脳がそのように支配されているので、その脳の指令通りに考えて動くようになるしかありません。古い蛇というのが分かっていないので誰かのせいにして、その人間が悪くて、そうじゃない人間はそれよりは優れていると思うでしょうけれども、本当の原因、古い蛇、大きな竜とも言われている悪魔、サタン、世界中を惑わしている者が本当の理由だということが分かっていれば、すべての人が罪人であるということが分かるようになります。

　ということで、創世記3：20を見ると、その時まではアダムには名前があっても女性は女と言われていました。しかし、このことのあと、このように言われています。「さて、人は、その妻の名をエバと呼んだ。それは、彼女がすべて生きているものの母であったからである」。このときから、このエバから生まれる全人類は同じ罪人なのです。だから、エバという名前がつくようになりました。すべて生きている者の母。すべて生きている者がこの罪につながっているということです。すべての人は罪人なのです。イエス様が地上にいらっしゃったときに、律法学者、ユダヤ人たちが、現場で姦淫の罪を犯した女の人をイエス様の前に連れてきました。それでイエス様を引っかけるために質問するわけです。「あなたはこの現場で姦淫の罪を犯して捕まった女の人をどうしますか。モーセの律法によりますと、石打ちにして殺すべきだと言われています。でも、あなたは何でもかんでも赦すと、愛、愛と言っているから、どうしますか」。もし今まで通りにイエス様が赦すよとなると、「おまえはモーセの律法を犯す人間だ」と引っかけようとしたのです。そして、モーセの律法通りに石打ちにしようとなると、「今まで愛、愛と言っていたのは全部嘘でしょう」と引っかけようとしたわけです。そのときイエス様は腰をかがめて地面に何かを書いていました。すると、もっと騒いでわぁわぁしていた時に、イエス様が腰を上げて頭を上げておっしゃいました。「あなたがたの中で罪のない人間が先に石を投げなさい」。すると、大人から小さい子どもまでひとりひとり石を下ろして、皆去って消えていなくなりました。最終的にイエス様が女の人に聞きます。「あなたを石で殺そうとしていた人たちは、つまり、律法、世の中の法則というものはどうなっているのか」「何も見えません」。イエス様と女の子だけが残りました。その時、イエス様が「わたしもあなたを罪に定めないから、これから罪を犯さないように気をつけなさい」とおっしゃいました。なぜ現場で姦淫の罪を犯していた犯罪者に向かって石を投げようとするのでしょうか。そのような思いがどうして生じるのでしょうか。悪い行為をしている者は悪くて、それに当たらない自分はそれより悪くないと思っているからでしょう。すべての人が罪を犯したので、すべての人が罪人だということが分かっていないと、石を投げるしかありません。行いや行為を通して比較し、優劣をはかるようになるしかありません。そこに憐れみと赦しと希望と幸せなどは見ることができません。すべての人は罪人なのだということに気づくことはどれほど大切なことでしょうか。人生観がまるごと変えられる祝福なのかということを考えないといけません。ダビデはとてもとても辛かったのです。家族のこと、特に子どものことだからです。でも、そこで神様のメッセージを見るようになります。この家族だけではなく、世界中の人が、おまえの家族がこれであればすべての人は罪人なのです。

　パウロはこれが分かっていたので、律法学者、ユダヤ人の出身で、ステパノが殺されるときに、当然だと思っていて、その証明の人間として立っていた人間でした。復活のイエス様と出会って以来、彼らはローマ3：23、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」と宣言しています。これが神様のメッセージです。悪い、良い、正しかったのか、どうだったのか、その裏に隠されている神様のメッセージを見るようにしなければなりません。このメッセージに気づいた者が、「なるほど、だからすべての人にキリストが必要なのだね」となります。しかもただ必要であるわけではありません。すべての人にキリストが絶対的に必要なのだなというメッセージを聞くことになります。人は千差万別です。金持ちもいれば貧乏な人間もいて、性格が優しい人間がいればタフな人間もいるし、犯罪者がいれば警察官がいるし、いろいろな人間がいます。しかし、すべての人が罪人なので、その優劣をはかることはできません。また、自慢できる良いものということを無視はしませんが、格差が生じるしかないその違い、良い条件など、どのようなものでもその人に本当の幸せをもたらすことができません。人生の問題を本当に解決することはできません。いのちをもたらすことはできません。だから、キリストが必要なのです。今信じたばかりの人は、いろいろ昔のものが入っていて、まだ修正されていないからだと理解できますが、問題なのは教会に通っているクリスチャンでも、長く教会に通っていながらもキリストが絶対的にすべての人に必要だというメッセージを持つことができないまま、世の中で優劣をはかり、格差を生じさせるようなものをメインに求めて、何を食べるか飲むか、ごりやくをメインのターゲットにしてお祈りをしたり、何かを評価したりするようなクリスチャン、教会がなんと多いでしょうか。それはメッセージが理解できていないからです。この聖書が、神様が語っているメッセージを体験していないからです。確認していないからです。その状態でものすごく勉強して優秀な成績を収めたとしましょう。それがどの方向に転ぶのでしょうか。心配です。とても優秀な人間も無能な人間もいます。成績の良い人間、悪い人間、才能のある人間、そうじゃない人間、黒人、白人、有色人種、戦争が起きているところ、平和に暮らしている国、先進国、後進国、いろいろな違いがあります。けれども、その違いゆえにこれが良いと思っているものが、その人の人生を本当に根本から変えられるものなのかと言いますと、全くそうではありません。すべての人にキリストが必要なのです。だから、教会があり、皆さんが今存在しているわけです。これが分かっていないと、なぜ自分が今偶像だらけの日本の国に生まれて、今の時代に生きているのか、その意味も理解できません。だから、ちんぷんかんぷんに生きるわけです。使徒26：29を見ますと、罪囚としてアグリッパ王に尋問されていたパウロが言います。パウロはアグリッパ王の尋問に対して、返事をするふりをしながら事実を話しましたが、実は伝道したわけです。アグリッパ王は馬鹿ではないから、「おまえはわずかなことばで私に伝道するつもりなのか」と怒ったわけです。そのときに真顔になってパウロが言います。「王様。王様だけではなくて、ここにいる皆が、私が鎖につながれているこれ以外は、全員私のようになってほしいのです。自負とともに王の冠をかぶって指一本で人を殺せる権限を持っているかもしれませんが、あなたにもキリストが必要なのです。王の冠があなたの人生を変え、あなたに真の幸せをもたらすわけではありません」という話なのです。パウロは分かっていたので。これがクリスチャンです。

　そのパウロがローマの教会に手紙を書いて送りました。先ほどのローマ3：23の前の部分を読みたいと思います。「さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。

なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません」。ユダヤ人でも異邦人でも、そして、当時世界最強の国だったローマの人間でも関係なく、キリストでなければいけません。キリストが必要なのです。そして、神様はその人間に唯一、絶対的に必要な人生の答え、希望、いのちであるキリストを世に約束通りに送ってくださいました。ヨハネ3：16、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」。この世に送られたキリスト、その方がイエス様です。十字架にかけられて、よみがえられて、すべてを完了したと宣言された、蛇の頭を踏み砕いて勝利されるという約束を成就されたイエス様こそキリストです。ですから、このメッセージが分かったときには、この世の中には地球上、2種類の人間しかありません。キリストを持っている人間は宣教師、キリストを持たない人間は宣教の対象になるわけです。それ以外の人種はありません。存在しません。ダビデにすさまじく徹底的にこのメッセージが刻まれるようになりました。皆さんの人生観、いろいろな悩み事、葛藤などよくよく考えてみてください。本当にすべての人は罪人で、すべての人にキリストがしかも絶対的に必要だというメッセージが皆さんのものでしょうか。そうすると人生観が変わるはずです。世界を見る目も変わります。

　これから日本の総会は、偶像の文化が骨にまで根を下ろして、人間中心主義が世界のトップを走り、災難を避けることができない、この日本の国を捕らえている暗やみの悪魔、サタンを勝利のイエスの御名によって縛り上げる、打ち破る祈りをします。離れていても総動員して同じ時刻に霊的な戦線を敷いて霊的な戦いの祈りを、教会のために個人のために祈る前に、日本のために祈る総会にしようとしています。見ていれば、分かっていれば祈るしかないでしょう。本当にそのメッセージが入っていて、そのつもりで祈っている人が一人でも起こされていれば、それは天のように思われていても日本の長い悪魔の文化に対して、それを砕いて崩していく天からのパワーになるということを私たちは信じています。そのために私たちは今生かされているものではないでしょうか。すべての人は罪人なのだ。だから、すべての人にキリストが絶対に必要なのだ。こういうメッセージがその人に入っている場合には、人とお互いに比較しあったり、人間のための葛藤、憎しみや復讐の思い、争いなどから自由になり、むしろすべての人を生かす者として残りの生涯を生きるようになるでしょう。言葉を替えますと、葛藤が生じているところにその人が入りますと、そこに平和が訪れてくるようになるし、争いがそこでストップするようになります。死んでいく者が生かされるいのちのわざが行われる人生の道を歩むようになるでしょう。つまり、伝道と宣教が自分の人生の理由である者として生きるようになります。すべての人が罪人で、すべての人にキリストが必要だというメッセージが刻まれている者は、結局短い人生、まことの勝利の人生を歩むようになります。金持ちになるかどうかではなくて、本当に輝く勝利の人生を歩むようになります。ぜひこれから1週間だけではなくて、このメッセージを握って、この事実が、すべての人は罪人で、すべての人にキリストが必要なのだというメッセージが、自分の家庭、現場において事実その通りに確認し続けるようになることを祈りたいと思います。それで神様の恵みでしょうけれども、皆さん、心から「ああ、なるほど。本当に福音が必要なのだね。なるほど、だから私がここにいるのだね。だから、無能な人間、ちっぽけな人間なのだけれども、いろいろな葛藤があり弱さがあるのにもかかわらず、だから、私が存在し、だから、私がここに今遣わされているのだな」と確認してください。それをCVDIPと言います。理論で聞いてではなくて、メッセージを握っていて、現場で確認してください。神様が私をここに送られたのだなということが確認できなければなりません。皆さん、小さい子どもから全員、今、ある人は大変な問題の中に、ある人は答えの中にいるかもしれません。そのすべてが私たちをCVDIPの中に導き入れようとしている神様の導きなのです。メッセージに目覚めるようにしましょう。それで結局自分の人生すべてが答えである、そのような何も怖くないパワフルな人生を全員歩いていただきたいと願います。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。ありがとうございます。この日本の国を憐れんでください。私たちに何の力もありません。しかし、イエス・キリストを信じています。神のみことばをメッセージとしてしっかり握って、私たちの存在の意義を改めて、そして、この日本の偶像の文化、人間中心主義の中に神の国が臨まれ、いのちの運動が行われるようにｓうることができるすべてが私たちに備わっていることに気づき、祈ることができるように祝福を与えてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。